

## 腎機能低下と心臓血管病による死亡リスク上昇に関連あり～日本の研究から

腎機能が低下した患者は、末期腎不全よりも心筋梗塞や脳卒中などの心臓血管病により死亡するリスクが高いことが指摘されている。とくに慢性腎臓病のステージG3a

(eGFR45～59 mL/分/1.73m<sup>2</sup>)の患者はG3b(同 30～44 mL/分/1.73m<sup>2</sup>)の患者より死亡リスクが低いと考えられている。そこで、本研究では大規模な日本人集団を対象に、慢性腎臓病のステージ別の心臓血管病イベント発症率を長期間にわたり調査した。

1993年に茨城県で健康診断を受診した40～80歳の一般住民97,043人(男性33,131人、女性63,912人)が対象となった。対象者を慢性腎臓病の重症度別にeGFRで5つの群(60以上、50～59、40～49、30～39、30未満;単位はいずれもmL/分/1.73m<sup>2</sup>)に分け、全死亡および心臓血管病による死亡リスクを比較した。平均追跡期間は17.1年であった。結果、全死亡数は20,534人で、このうち心臓血管病による死亡は5,995人であった。eGFR60以上の群に対する心臓血管病による死亡のハザード比は、中年男性ではeGFR45～49群で有意に上昇したが(多変量補正後ハザード比1.82)、高齢男性では有意なリスク上昇はみられなかった。一方、女性では中年層、高齢層ともに、全死亡および心臓血管病による死亡リスクは、eGFR45～49群でわずかながらも有意な上昇がみられた。

したがって、日本人の慢性腎臓病患者において、腎機能低下の進展とともに心臓血管病による死亡リスクが上昇することが明らかとなった。とくに、中年期の男性とすべての年代の女性では、慢性腎臓病重症度分類G3aの範囲内であっても、eGFR45～49 mL/分/1.73m<sup>2</sup>への低下は心臓血管病による死亡リスクの有意な上昇と関連することが示された。

出典 : PloS One. 2016; 11(6): e0156792